

第3章

第4部 沖縄県教育センターとの懇談会

加納 幹雄

1. はじめに

2008年3月24日に沖縄県教育センターを訪問し、県の研修全体を担うセクションの指導主事3名と面談を行った。そこでは、特に研修を企画運営する視点からの意見の聴取を期待した。本面談では、本研究会から小泉仁と加納幹雄が参加した。

2. 研究の目的と背景

小学校と中学校の連携の在り方を研究する本科研課題では、連携の際に行われる研修の内容だけでなく、研修の実態調査や立ち上げ企画など広範囲な情報を得る必要があると判断した。その点では、各都道府県が設置している県の教育センターには、各種の研修が集まっており、また、研修講座に参加する教員も多く、その点で、関係指導主事は、研修の実態について聴取する機会も多く、関係情報が集積されている可能性が高いと判断し、今回の面談を企画した。

3. 調査内容

3.1 全体的な状況について

小学校英語教育の推進にかかわる課題は、小中連携であるとの認識が示された。その必要性については、カリキュラムの系統性、指導方法内容の改善、発達段階に応じた指導の工夫、第2言語習得理論の活用、連携の内容の検討となっている。

また、評価の方法については、児童英検の利用が多く、全国比でみるとブロンズ正答率において、若干よい成果を得ていると思われる。ただし、今後適切な評価を行うとするならば、具体的な目標の設定やテストの方法の確立が必要となってくると思われる。つまり、ゴールの共通化が必要であるということである。

特に、現在多くの団体で課題となっている「文字と音読指導」については、フォニックス

スに長けた先生が5人いて、そうした先生を中心に進めていると聞いている。

3.2 小中連携について

浦添市では、「浦添市英語教育推進委員会」を設置し、宜野湾市では、「小学校中学校教育課程研究会」を設置し、研究を重ねている。

那覇市では、大きな特徴がある。中学校の英語の教員を小学校へ派遣し、また、もとの中学校に戻している。こうすることによって、中学校は小学校の実態が把握できるし、また、小学校は専科の教員の指導方法について学習でき、また日常的に相談することもできるという2つの好都合が重なっている。

本県の小学校英語に関する研修概要は、以下の通りである。グループ研究会を設置し、5～6校をひとまとめにして、小学校1年生研究会から中学校3年生研究会まで学年ごとに研究会を設置している。その内容は、小中相互授業参観、中学校1年生の教育課程の改善、中学校英語教育推進、研究リーダーの育成となっている。

また、指導のポイントは、楽しい「英語活動」から楽しい「英語教科活動」に発展させるようにすること、小学校教員が心がけることを統一すること、教材教具を見直し、楽しい授業づくりに努めること、ローマ字学習をしっかりと行うこと、英語ではめることなどである。また、中学校教員が心がける事項を設け周知を図っている。

3.3 県から見たときの課題について

県全体から小学校英語の実施状況を眺めると、次のような課題が整理される。つまり、学校間の実施上の差が広がってきていること、まだ十分に機能するような計画書がない学校もあること、学校ごとに指導力の差が広がってきていること、特に、高学年の指導にばらつきがでてきているのが心配なこと、また、遊べない子、心を開かない子も出てきていること、などである。

3.4 新しい研修の試みについて

本教育センターでは、IT教育の推進を進めており、平成18年度より小学校英語活動長期研修員等が作成した英語活動に関するコンテンツの提供などネットワーク内で情報交換が容易にできるように努めている。

この点は、先進的な試みである。つまり、小学校英語に関わるコンテンツの集積や開発を手がけており、今後には、積極的な情報提供システムを動かし、たくさんの関係教員がアクセスできるようになることが期待されている。

3.5 小学校英語の目標について

小学校英語に関しては、その目標は、やはり、第一義的に「広いコミュニケーション能力を育てる」ことにあると考えている。小学校では、コミュニケーションの素地を育てる

べきであろうとの考え方は、文科省の考え方と一致している。

ただし、小学校における成果を中学校教育の中で、どのように把握すべきかについては、小中連携の内容にも関わるが、さらに研究する必要があると考えている。つまり、小学校から言えば見届けであり、中学校からは小学校英語の実施内容理解である。この点は、今後さらに研究を要すると考えている。

3.6 評価の在り方について

テストについては、例えば、宜野湾市立志真志小学校ではテスト用のCDを作成して学校内で統一的に判定することができるシステムの構築に動いている。また、那覇市では、中学校1年生に向けたテスト問題を作成しているケースもある（那覇市教育委員会が英検5級程度のリスニング問題を作成し中学1年生対象に実施）。

4. 考察

4.1 沖縄の地域性を活かした実践例について

沖縄の地域性を生かした活動内容の例が紹介された。例えば、宜野湾市立普天間小学校の国際交流事業にみられるように、毎月のように様々な国からの外国人を招待して交流を図った結果、どのような国の外国人が訪問しても、子どもたちは普通の日本人のおじさんやおばさんと話すように臆することなく英語を使って話をしたという報告も出てきている。違いを強調するのではなく、共通点を強調することによって外国人に対する親しみが湧き、臆することなく接することにより、学校全体が明るくなり、子どもたちの挨拶も増えてきたという報告である。こうした学習をベースにして、中学校がうまく継続して行われることとなれば、それは、いわゆるコミュニケーションの素地の育成に成功したことになるだろう。

4.2 研修体制について

学校における研修体制として、研修内容を改善する係と、実際に小学校英語を進めるうえで出てくる諸問題を受け止め整理する役割を担う英語コーディネータがいるような2人体制は、優れたシステムである。沖縄では、このような校内の体制に加えて、各小学校の進学予定先である中学校を中心とし、校区内にある小学校が一つの研究グループとなって小中が連携し、継続して児童・生徒の発達を見守るシステムができあがっている。こうした、校内の体制と校外の体制が相互に共同的に働くことが、連携の本意であろう。